



医療の質と画像診断

在院日数と画像診断管理加算

2020/1/24

DPC/PDPSについて

- DPC/PDPSは、平成15年4月より82の特定機能病院を対象に導入された急性期入院医療を対象とする診断群分類に基づく1日あたり包括払い制度
- DPC/PDPSの対象病院は段階的に拡大、平成30年4月1日時点で1,730病院・約49万床
- 急性期一般入院基本料等に該当する病床（※）の約83%を占める

※ 平成28年7月時点で7対1または10対1入院基本料を届出た病床

- MDC（Major Diagnostic Categories）18種
- DPCコード4,955分類（うち支払分類2,462分類）

※ 平成30年度改定時

医療の質と画像診断

- 画像診断が医療の質を担保しているという指標が必要

- 一般的に

「平均在院日数は、急性期病院の治療能力を反映している」と見なすことができる

- 正確な診断と適切な治療方法を選択する能力
 - 患者の身体に負担をかけずに手術や治療を行う能力
 - 合併症や医療ミスを防止する教育訓練
 - 患者の回復を助けるリハビリ支援
 - 適切な退院支援や後方受入施設との連携など
- 急性期病院の総合力の反映ともいえる

在院日数について

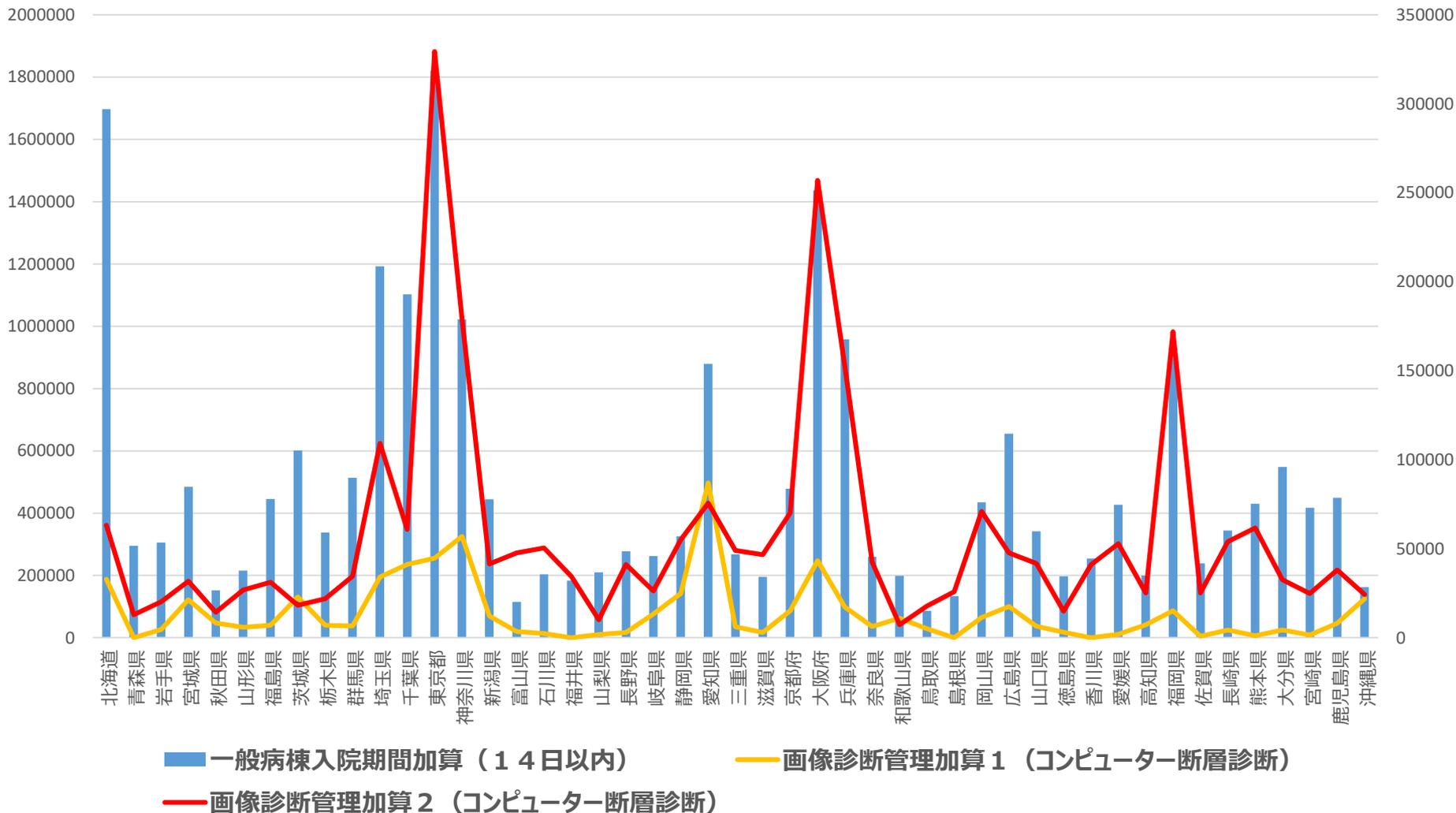
- 在院日数指標（全国平均 = 1）
= [全国平均のMDC別平均在院日数]
÷ [当該病院のDPC毎の患者構成を全国平均に合わせて再計算したMDC別平均在院日数]

(病院情報局 加藤良平 一橋大学非常勤講師 (医療産業論) より引用、改変)

- 数値が大きいほど、同じ傷病を治療する場合の平均在院日数が短い
- DPC ごとの在院日数により、同じ DPC でも在院日数が全国よりも長いのか短いのか判断可能
- 数値は 1.0 が全国平均の在院日数であり、大きい方が全体として在院日数は短く、効率よく診療している

第4回NDBオープンデータ(令和元年(2019) 8月公開)に基づく 入院期間加算(14日以内)と画像診断管理加算の対比 (平成29年4月-平成30年3月 診療分)

一般病棟入院期間加算(14日以内)と画像診断管理加算(コンピューター断層診断)



一般病棟入院期間（14日以内）と 画像診断管理加算（コンピューター断層診断）

- 一般病棟入院期間加算（14日以内）を用いて、簡易的に在院日数と、画像診断管理加算との関連性を見た
- 東京、大阪、福岡では画像診断管理加算2と、14日以内の入院期間加算算定が多く、一致している
- 北海道では14日以内加算の算定が多いにもかかわらず、画像診断管理加算2の算定がきわめて少ない
- 日本全体として、両者が乖離している自治体は、東京以東に多い傾向